

社会情報学部

ハンセン病問題啓発事業

担当学科等 社会情報学講座

担当者 西村 淑子教授

◎事業概要

1907年(明治40年)に始まったハンセン病患者の隔離政策は、1996年(平成8年)の「らい予防法」の廃止まで、およそ90年間にわたって行われた。患者を強制収容するため全国13カ所に設置された国立療養所の1つが、栗生楽泉園(群馬県草津町)である。

現在79名の元患者が暮らす同園は、資料館も併設され、ハンセン病隔離政策の歴史を学び、元患者の体験を聞くことのできる貴重な場所となっている。しかし、入所者の平均年齢は86歳を超え、ハンセン病に関する歴史や体験を語り、語り継ぐことができる方は年々少なくなり、ハンセン病問題の歴史の継承、啓発活動の継続が課題となっている。

そこで、本学、栗生楽泉園及び同園入所者自治会との包括的事業連携協定に基づき、以下の事業を実施した。

- (1)ハンセン病問題・栗生楽泉園スタディーバスツアーの実施
- (2)ハンセン病問題・栗生楽泉園に関するガイドブックの作成

◎実施事業等

- (1)ハンセン病問題・栗生楽泉園スタディーバスツアー(全2回)

日程: 10月16日・11月23日

参加費: 無料

参加者: 各回30名

行程:

08:00 高崎駅発

10:00 草津町立温泉図書館到着

草津温泉、リーかあさま記念館等見学

13:00 栗生楽泉園到着

重監房資料館、社会交流会館等見学

16:00 栗生楽泉園出発

18:30 高崎駅到着、解散

- (2)「ガイドブック草津・栗生楽泉園」の作成と関係機関への配布

ハンセン病とは、日本のハンセン病政策、草津温泉とハンセン病、栗生楽泉園の歴史と現在、重監房資料館、入所者インタビュー等を取り上げるとともに、草津温泉と栗生楽泉園の見学に役立つ様々な情報を掲載した。

合計3,500部印刷し、群馬県内の図書館や観光案内所、行政機関、教育機関等に無料で配布する。

◎期待される成果

社会情報学部が中心となって2014年(平成26年)から実施してきたハンセン病問題啓発事業は、地域の新聞やテレビでもたびたび取り上げられ、地域社会に認知されるようになった。

ハンセン病スタディーツアーは、参加希望者が多く、各回の定員30名がすぐにいっぱいになった。実際に現場を歩き、当事者の話を聞く機会を無料で提供するスタディーバスツアーは、ハンセン病問題の正しい理解の普及に役立つものと考えられる。

今年度作成した「ガイドブック草津・栗生楽泉園」では、「草津温泉とハンセン病」の項目を設け、ハンセン病問題を地域社会の歴史として取り上げた。また、実際に草津温泉と栗生楽泉園を見学する際に役立つと思われる様々な情報を掲載した。このガイドブックにより、地域住民が、ハンセン病問題を地域社会の問題・歴史としてより身近に感じ、関心を持つこと、また実際に草津温泉と栗生楽泉園を見学し、ハンセン病問題について理解を深めることが期待される。